

阿南ふるさとと探訪

その59

阿南市文化財保護審議会会長

湯浅良幸

室町幕府・平島公方(二二二)

持隆の死と山口行き

義冬の阿波入国についてもつと知りたいたとの要望があった。今までも書いたが、「那賀川町史」をなぞる作業になるが、再度触れることにする。

天文三(一五三四)年。足利義冬母子は出里である阿波国細川氏を頼って淡路国志筑へ下ってきた。その時、従った諸将十五人ら都合二百五十人(三百五十人の説もある)という。連れてきた諸将十五人は次のとおり。

富永豊後守抛宗(大和国高市領主)
三江兵庫頭善行(播磨国野口領主)
結城但馬守重正
小寺新右衛門尉(河内国松原領主)
荒川民部少輔珍國(三河国八名

住人)

村井権内(東国者、生所不明)
森小平太時常(越前国長坂住人)
足代七郎左衛門(武蔵国住人)
漆田将監延房(摂津国豊島郡浅田村領主)
西山源八(讃岐国志度ノ住人)

乾鶴介定直(河内国若江庄領主)
安井源右衛門信実(中国者)
堀善左衛門影盛(近江国鱒江住人)
真淵伊豆守忠元(但馬国出石住人)
湯浅治大夫(阿波国那賀山住人、清雲院御守)。

湯浅治大夫は唯一の阿波国人で、義冬の母細川成之の娘の輿入れに従って上洛しこの度帰国した。以上のうち、富永、三江、荒川、湯浅、結城、乾の六人は留め置き、他の九人には暇を出し

た。

細川持隆は母子一行を阿波へ迎え、足利將軍家と関係の深い天龍寺領のうち平島十二カ村、更に楠根、吉井、仁宇、和食の四カ村計十六カ村三千貫高を与えた。

更に持隆はわが妻の妹、つまり大内義興の娘を義冬の妻とした。

義冬は將軍職を望んで再度上洛を企てた。阿波守護細川持隆の重臣三好義賢(実休)はこれに反対し、天文二十一(一五五二)年八月九日、持隆を死に追いやった。つづいて二十三年三月十六日、義冬の母清雲院も没した。弘治元(一五五五)年四月十日、保護者持隆の死により義冬は妻と義栄を連れて妻の実家山口の大内氏を頼った。永禄六(一五六三)年十二月二十日、妻は没した。義冬は義栄を連れて帰国した。大内氏の娘である妻に先立たれたから、大内氏の



阿波公方民俗資料館に展示されている足利義冬公の像。

加護に不安を感じたに違いない。つまり、義冬父子は平島を離れて八年間も山口に滞在したことになる。従来、阿波を出て長期間山口に滞在したことについてはあまり注目されなかった。万一、妻の死去がなければ、更に山口滞在は延長されたと考えられる。保護者である持隆を失い、山口でも妻の死によって止むを得ず阿波へ帰国したもの、やがて蜂須賀家政の阿波入国によって所領三千貫高を茶料百石に削減された。公方の居心地は更に悪くなったと見てよいだろう。

(続く)

参考「那賀川町史」上巻

先人たちの言葉に心打つ

県内では2年ぶりで阿南市では初めての「今、伝えたい徳島・先人の言葉たち」展が、11月27日から6日間、文化会館で開催されました。

徳島にゆかりのある先人たちの言葉35点のなかには、阿南市で幼少期を過ごした作家の北條民雄氏(大正3年〜昭和12年)が、療養所で過ごすハンセン病患者の姿を描いた「患者達は決して言葉を聴かない。人間のひびきだけを聴く。これは意識的にそうするのではない、慮(はづか)られ、辱(はづか)められた過去に於て体得した本能的な嗅覚がそうさせるのだ。」という言葉も紹介され、来場者は静かに作品を眺めながら、言葉に込められた作者の想いに耳をすませていました。

